
七両目のリンゴ

A Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七面鳥のリング

【Zマーク】

Z0050Z

【作者名】

AQ

【あらすじ】

「内気な私の初恋は、三角関係で出発。終着駅はどう?」

電車というお題で書いた、少女漫画風の恋愛短編です。ケータイ系サイトの企画向けに考えました。このキャッチコピーでお分かりのとおり、糖度高めの身悶え系……古き良きピュアな少女小説の世界を「堪能ください」。

「だから、真由ちゃんはカワイイんだって。自信持ちなよー」司もそう思ひよねつ？」

そんなに大きな声で言わないで……。

私は顔を伏せ、できる限り猫背になつてみた。首に巻いたマフラーを鼻の下まで引っ張り上げて。

でも白いマフラーじゃ逆効果。リンゴみたいに赤く染まつたこの顔が、余計目立つてしまつだけ。

結局マフラーを解いた私は、その眩しい白を見つめて溜息を一つ零した。

後悔したつて仕方ない。これは自分で決めて買ったモノだから。私には似合はない、ふわふわ綿帽子みたいなマフラー。少しでも“雪ちゃんっぽく”なりたくて選んだ……。

「ねえ、司つてばつ！」

「……ああ、うん、そうかもな」

雪ちゃんにしつこく促された司君が、曖昧に頷く。
私の方には、一切目を向けずに。

「ちょっと司、この際だから言わせてもらひナビねえ

「アホ、お前は黙つてろ」

司君は、雪ちゃんのおでこに口тинと拳骨を落とす。「痛つ！」
と大げさに騒ぐ雪ちゃんを、他の乗客が気にし始めてくる。『見るよ、あそこに可愛い子がいる』なんて、ヒソヒソ声が輪唱する。

揺れる電車の音よりも、うんと小さな声を拾つてしまつ私の耳は、いわゆる“地獄耳”だ。その話をしたとき、雪ちゃんは「地獄耳じやなくて、うき耳だね！」と笑つてくれた。でも、どう見たつて雪ちゃんの方ががつときさんだと思つ。

雪ちゃんは、私の理想をギュッと集めたような女子。背が小さくて、目がクリッときいて、肌は雪みたいに白くて、栗色の猫つ

毛は柔らかで。真っ黒ストレートヘアで淡白な顔立ちの私が日本人形なら、雪ちゃんは西洋のお人形。セーラー服の赤いリボンが良く似合つ、パーフェクトな美少女。その上明るくて優しくて、皆の人気者。

そんな雪ちゃんと仲良くなれるなんて、夢みたいで……。
なのに今はちょっとだけ、辛い。

*

あれは忘れもしない、入学式の日の放課後。
内気な私にはその日友達ができず、一人寂しく帰り支度をしていた。「誰か話しかけてくれないかな」なんて他力本願な期待が、作業の手をいつもよりスローにさせる。

神様は、ささやかすぎる私の願いを叶えてくれた。
突然教卓の前に立つた雪ちゃんが、クラスメイト全員に向かって凛とした口調で問いかけた。

「アタシんちつて春咲町なんだけど、誰か同じ方向のひと居ない?」
春咲町といえば、私が乗る電車の終着駅だ。うちの最寄駅はもつと手前だし、途中から各駅停車に乗り換えなきやいけないけれど、急行で二十分くらいは重なる……。

「うち田舎だし、通学時間長くて退屈なの。同じ電車だつたら一緒に帰ろうよ!」

その提案に皆色めき立つた。遠巻きに見ていた雪ちゃんと、正々堂々お近づきになれるチャンス。

もちろん私も例外じゃなくて。

気付いたら、蚊の鳴くような声が唇から零れて、ふわんと雪ちゃんへ飛んでいた。

「あの、途中までで良かつたら……」

「やつた、女の子が居た! 確か伊藤真由ちゃんだよね? よろし

くつ

私の元へ駆け寄ってきた雪ちゃんが、有無を言わさず強引に握手してきた。大きな瞳を煌めかせながら、屈託なく笑いかけてくる。つられて笑みを返したとき…… 敏感な耳が、ハスキーな低い声をキヤッチした。

「おーい、帰るつぜ」

声の主は、一人の見知らぬ男子だった。教室のドアに手をかけ、中を覗きこんでいる。

身長百七十センチの私より、さらに頭一つ分くらい背が高い。少し長めの前髪と、冷たそうな切れ長の瞳…… その目が、私の方を見てふつと優しげに細められた。

正確には、私の正面に立つとびきり可愛い女の子を見て。雪ちゃんは、私を捕まえていた手をするつと解くと、彼に手招きした。

「ねえ司つ！ 旅の道連れ見つけちやつた！ 真由ちゃんだよつ」

「あー、キヤンキヤンうるせえつ」

教室の入り口から、長いリーチでほんの数歩。近づいてきた彼が、至近距離から私を見下ろしてくる。

「ふーん。道連れ、ねえ」

男子とろくに会話をしたことが無い私に、容赦なく浴びせられる彼の鋭い視線。逃げたいのに、足がすくんで動けない。地面にボタリと落ちるリンゴみたいに、心じと彼に引き寄せられてしまう。

「マコつて、どんな字書くんだ？」

「お父さんみたい……」

「はあつ？」

うつかり呟いた私の声を、雪ちゃんも彼も聞き逃さなかつた。次の瞬間「確かに司オツサン臭いしつ」と爆笑する雪ちゃん。平謝りの私。

本当は「うちのお父さんみたいに背が高いね」って言いたかつた。少女漫画に良くある、向かい合つた男女の告白シーン。女の子の方がアゴを少し上げて上目遣いになるその姿勢は、身長がコンプレ

ツクスの私にとつて憧れのシチュエーションで。

そんなひとに初めて出会つたから、驚いたの。

……なんてこと、知らない男の子に言えるはずがなくて。

上手く言葉が出ず、赤くなるばかりの私に、彼は「もうこいよ」と苦笑し、大きな手で頭をポンと叩いてくれた。

その心地良い重さを感じながら、私は思った。

ああ、このひとが雪ちゃんの彼氏だつたらどうじょひって。

*

幼なじみの雪ちゃんと同君、そして私。

三人で帰るようになつてから、初めての冬がやつてきた。

ときめく春、うちとけた夏、穏やかな秋。各駅停車のようだし、ゆっくりと芽吹き、枝葉が伸び、色づいてきた私の初恋。

なのに、冬が來ても花開く気配は無く……むしろ、薔薇のまましおれそうな予感。

「 だいたい司は昔つからさあ」

「 雪つ、それ以上言つならこの口縫うぞ」

「 へー、やれるもんならやつてみなつ」

ファイティングポーズを取る雪ちゃんを前に、司君はつと呻いて後ずさる。こう見えて雪ちゃんの特技は空手だから、人は見かけによらないと思う。普段は「ワモテな司君も、バトルモードの雪ちゃんには敵わない。まるでつわさにあしらわれる大型犬だ。

こうしてじやれ合う二人を、ずっと微笑ましく見守つてきたのに、今の私は卑屈な気持ちにしかれない。手にした白いマフラーを持て余しながら、私は窓に向つて流れる景色を見やつた。

「お似合い、かあ……」

二人には聽こえない、微かな呟きを落とす。

数日前、いつものように教室を出る私たちに向かつて放たれた、

誰かの囁き声。それは私にしかキャッチできなく、くらぐ密やかで……

「小さな棘を含んでいた。

『雪と司君つてホントお似合い。伊藤さん、良く邪魔できるよね』

それからずっと、胸が苦しくて。

以前、思い切って雪ちゃんに尋ねたときは「違うよ、つちりは單なる腐れ縁！」と笑い飛ばしていた。それでも周囲から“お似合い”と噂されていることは、本人たちも自覚しているらしい。入学当初は火消しに躍起になっていたけれど、最近は諦めてしまったようだ。

でも、噂したくなる皆の気持ちも分かる。間近で見ている私には、一人が長年紡いできた心の絆が痛いほど伝わるから。

それが、運命の赤い糸のように思えて……どんどん胸が苦しくなっていく。

いつも、二人が本当に付き合つてしまえばいいのに。私はさりげなく、別の電車に乗り代えてあげるから。各駅停車に乗つて、一人で帰るから……。

「どしたの？」真由ちゃん。ぱーっとしづかって

雪ちゃんの声で、私は夢から覚めたように瞬きする。電車の速度は緩やかになり、窓の外には見慣れた乗り換え駅の看板。それでもぼんやりしたままの私に、司君が珍しく早口で声をかけってきた。

「真由、降りるんだろ？ 早く行けよ」

厚手のダッフルコート越し、背中を押してくれた優しい手のひら。触れてもらえたことが嬉しくて、でもそれ以上に悲しくて……私はさよならも言わずに、開いたドアから飛び出した。

そうだよね。邪魔者は、早く消えなきやね。

勝手に潤んでくる視界。それをこまかすようにホームを走り出した私のローファーが、改札前で急ブレーキをかけた。

首筋を撫で、長い黒髪を舞い上げる冷たい北風。

「マフラー、忘れた……」

とつさに横を向くと、急行は発車寸前。
私はもう一度、その電車に飛び乗った。

*

本当はずつと、こうしたかった。

私が先に降りた後、二人がどんな風に過ごしているのか見てみた
かった。

もしかしたら普段とは別人みたいに、甘い声で囁き合っているの
かも……。

一人が居るのは八両目。ドクドクと激しく自己主張する胸を抑え
ながら、私は車両を繋ぐ重いドアを開けて進む。その度に、ギイギ
イと悲鳴に似た轟音が鳴る。いつもなら耐え切れず耳を塞いでしま
うところなのに、今は気にならない。

それくらい、私のアンテナはまだ見ぬ“恋人同士”的一人に向け
られていた。

ついに、最後のドア。

この扉を開けたら、全てが終わる。

土壇場で吹きつける、冷たい臆病風。私は腰をかがめ、分厚いガ
ラス窓の向こうをそつと盗み見た。

二人は、ドアを隔てたすぐ傍に居た。

ネガティブ過ぎる私の予想は外れ、一人は相変わらず楽しそうに
じやれ合っている。思わず胸を撫で下ろしかけたとき、微かな違和
感を覚えた。私はもう一度、曇りガラスの向こうに目を凝らした。
「あれ……？」

ガタンゴトンと電車がバックミュージックを奏でる中、古い無声
映画のようにコミカルなやりとりをする二人。くるくる立ち位置を
変える雪ちゃん、必死の形相で手を伸ばす司君。

雪ちゃんが背中に隠しているのは、ふわふわの白い塊。あれほど

う見ても、私のマフラーだ。

いつたい何をしてるの？

好奇心が、少しの勇氣へと変わった。

震える指先に力を込め、ドアをスライドさせる。ほんの数センチの隙間でも、私の耳には充分。

聴こえてきた会話は……。

「 雪！ 返せよ！」

「 やーだよつ。ヘタレな司なんかに、コレはあげないつ

「俺が拾つたんだぞ！」

「ハイハイ、真由ちゃんがコレ落としたのに気付いて、わざと言わなかつたんだよね？ そんなことを“キッカケ”にじょうなんてヘタレ過ぎ」

「お前、俺の味方じやなかつたのかよ！」

「残念でした。真由ちゃんのマネージャーには、いろんな人から依頼が来るんですつ。これはバスケ部の田中君に売……つと何でもないい

「てめつ、売り飛ばす氣か！」

「真由ちゃんのリップ痕付きマフラー、いくらになるかな……なんてねつ」

「ぜつてー許さねえ！」

身体から一気に力が抜け、重たいドアは緩やかに閉められる。私の心には、先程聴こえた会話がぐるぐる回る。

マフラー売るつて、何……？

その前に、司君がすごく怒つて……。
えつとえつと……。

真っ赤になつた私を、ぐらぐら揺らす急行電車。

通り過ぎるグレーの街も、緑の山並みも、その向こうに広がる茜空も……各駅停車に慣れた私には、全てが速すぎて眩暈がしそう。

でも、降りちゃうなってもったいないよね？

その日私は、七画田の乗客となつた。
終着駅のホームで聞く……私の恋の花。

(後書き)

解説＆作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

2009年12月、ケータイ小説系サイト『ジョルダン・読者の広場』に投稿した作品です。（嬉しいことに一位という結果になりました。ありがとうございます！）ジョルダンだけに、お題は『電車』。いつもお題への切り込みが弱くなってしまうのですが、この作品では（直接的にも、比喩としても）満遍なく使い倒したつもりです。なおかつ、ケータイ小説ということで、古典的な少女漫画っぽい作品を目指しました。（自分が考えるケータイ小説系＝描写はライトで平易、モノローグ、体言止め、改行多め。当然糖度も高め！）あと今回は初チャレンジとして、内気なモジモジ系キャラを主人公に設定。自分が共感しにくいキャラを動かしてみて、あらためて小説の難しさを知ることに。○△○さらに力を入れたのはタイトル！最初に思いついたのは『各駅停車の恋』ってかなり直球…。こつちはそのまんまなのですが、今回はタイトルにも比喩をw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0050z/>

七両目のリンゴ

2011年11月30日14時53分発行